

日本地球惑星科学連合2018年大会「最新の大気科学： 台風研究の新展開～過去・現在・未来」セッションの報告

中野 満寿男*1・和田 章 義*2・金田 幸 恵*3・伊藤 耕 介*4

日本地球惑星科学連合2018年大会（千葉市幕張メッセ）にて、日本気象学会主催、米国地球物理学連合・アジア・オセアニア地球科学会共催セッション「最新の大気科学：台風研究の新展開～過去・現在・未来」が5月23日（水）に開催された。台風研究は、新しい観測機器・技術や数値シミュレーションの大規模・高度化により、年々厚みを増しつつ新たな展開を見せ始めている。本稿では主に招待講演について紹介する。

Michael Fiorino 氏（米国・コロラド大）は台風予測精度向上について数値予報の観点でレビューし、今後の精度向上に向けて、台風ボーガスに頼ることなく、全球モデルのさらなる精緻化が重要であると主張した。James Terry 氏（アラブ首長国連邦・ザイード大）は熱帯低気圧ベストトラックデータから、経路の蛇行具合を指標化し、類似経路を持つ熱帯低気圧の特徴、特に蛇行具合が顕著な熱帯低気圧は、強い勢力まで発達する傾向があることを示した。松岡大祐氏（JAMSTEC）は人工知能技術による熱帯低気圧の「卵」の検出手法について紹介した。人工知能技術に関しては、この他にも柴田大河氏（琉球大）や嶋田宇

大氏（気象研）の発表があり、今後、本技術を用いた研究の発展が予感された。Michael Bell 氏（米国・コロラド州立大）は台風対流圏界面温度と台風強度との関係を、領域モデルによる理想化実験結果により調査し、雲-放射フィードバックの重要性を強調した。山田広幸氏（琉球大）は2017年10月に実施されたT-PARCII プロジェクト航空機観測結果から、日本初となる台風眼内部の観測に成功したことを報告した。

2018年4月、6月と外国にて国際研究集会の開催が予定されており、それぞれ台風関連セッションが設けられていたことから、国際セッションの開催であるにも関わらず、海外からの投稿が前年と比べて減少することを懸念していた。しかし28件の投稿があり、10件は海外からの投稿であった。これも関連学会によるご支援のおかげであり、深く感謝申し上げたい。今後もセッションの開催を通して、日本における台風研究の発展に微力ながら貢献したいと考えており、気象学会員の皆様には引き続きご協力のほどお願い申し上げたい。

*1 (連絡責任著者) Masuo NAKANO, 海洋研究開発機構.

masuo@jamstec.go.jp

*2 Akiyoshi WADA, 気象研究所.

*3 Sachie KANADA, 名古屋大学.

*4 Kosuke ITO, 琉球大学.

© 2018 日本気象学会